

与謝野寛の歌論意識

— 才一次『明星』をめぐる —

岩 鼻 絹 子

才一次『明星』（明33・4～明41・11）が、近代短歌史上に華々しい業績を残していることは、周知のとおりであるが、その統率者であった与謝野寛はどのような歌論意識を有していたのであろうか。その事について、以下一つの展望を試みてみたいと思う。

寛の歌論を見る才一の資料としては、『明星』誌上に発表された文章をあげなければならない。^注いま、それらを考察の最良の資料としていきたい。

『明星』において、その作歌理念が明確に表わされたのは六号になつてからであつた。『明星』才六号所載の「新詩社清規」には次のような一条がみられる。

一、われらは互に自我の詩を發揮せんとす。われらの詩は古人の詩を模倣するにあらず、われらの詩なり、否、われら一人一人の發明したる詩なり。

この「新詩社清規」は無署名であるけれども、寛の筆になつてと思われる。ここに見られる「自我の詩」の意識は、これより早く「亡国の音」（『二六新報』明37・5・10—18）の

歌に師授といふものあり、師授は偶ま歌の形体を学ぶに必要なるのみ、歌の精神に至りては我れ直ちに宇宙の自然と合す、何ぞ師授の諄々を待たむ、一呼一吸、宇宙を吞吐する度量の如きは師と雖も譲らざる也、此の如くにして大丈夫の歌は成る。

に見ることができ、また、彼の歌集『東西南北』（明29・7）

小生の詩は、短歌にせよ、新体詩にせよ誰を崇拜するにもあらず、誰の糟粕を嘗むるにもあらず、言はば、小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ
という一文に見ることができ。

寛の個性豊かな歌を作ろうという情熱ある「自我」の呼びかけは、文学の世界では立ち遅れていた和歌の世界にあつては驚くべき新風であつた。

そして、「自我の詩」の理念のもとに寛は『紫』（明34・4）を、晶子は『みだれ髪』（明34・8）を刊行して、『明星』はその浪漫的歌風を確立するに至るのである。

「鉄幹歌話」(三)(十六号・明33・12)において彼は白仁秋
津の

恋ここに石とわびたる二千年太古ひさしく国に歌なき
という作を取りあげて

道德だ倫理だと云ふやうな、人為の規則に圧迫せられて
いた東洋の恋愛は恰も化石のやうに冷いものに成つてあ
る。古来誦すべき恋愛詩の一大雄篇を持たない国民は、
まことに寂寥の難に堪へない

と述べているが、その『みだれ髪』は、いわゆる道德を押し
破つておどり出たのであつた。

乳房おさへ神秘のとばりそと蹴りぬここなる花の紅ぞ濃
き

右の歌を「鉄幹歌話」(四)(才二「明星」才二号明35・2)
は次のように評している。

何かと思ひ悩み給ふ。人生の真の意義とや。さしもの神
秘の帳そと蹴りて、今の徒らに詞多き字者の君を驚かさ
む。見たまへ、此処なる花のくれなる濃きは、世に又と
なく貴らずや。恋は人生のまばゆき花、誰か口触れずし
て此真のにはびを罵る。

彼のこのような「恋愛賛美」の理念のもとに、その浪漫的
な明星調の歌は、数々の批難をあびつつも、三十四年後半に
は歌壇の主流をしめるまでになつたのである。

明星派が主流をしめるようになり、一派を形成しようや

く円熟期に入ろうとする頃、彼は同じく「鉄幹歌話」の(六)の
終りに「この欄を仮りて特にわが社友中某々諸君の一部に、
左の規言を呈す」として、五項目の規言を掲げている。

(一)省略

(二)次に言ふべきは、模擬襲踏の流行なり。所謂旧派の和
歌が文学としての価値を失ひ、今日の衰落を来せし
は、主として造新独闢の見地なく、思想、用語共に先
人の模型を繰返して陳腐を極めしに由るは諸君の知ら
るる所。而る旧派打破を以て起ちたる諸君にして、又
何ぞ早く当初の意気を喪ひ、旧派者流の陋弊に陥らむ
とするや。

(三)近時の作概ね修辭の複雑となりしは著しき進歩なれど
も、中に注意すべき悪傾向を云はむに、所含を多かし
めむが為めに名詞の配列多きに過ぎ、又は句法語法の
猥雑に流れ、読者の連想を惑はしめ、甚しきは無意味
沒趣味に終る事。次には何等の用意思慮も無く、妄り
に無□の名詞動詞形容詞を疊用し、或は無意味に句法
語法を畸拗にすること。次には同一語の屢々繰返さる
ることにして、例えばそぞろ・運命・と思へば・ふと
惑ひ(中略)ゑにし・絵師等の字面、一見嘔吐を催す
の感あり。

(四)修辭は複雑となりしも洗練は甚だ足らず。(中略)多
作を避けて成るべく精力を一首の上に乗せる用意あり

たし。

(五)あらゆる文学美術の上に趣味の修養を怠るべからざるは、余の常に云ふ所なり。

このような寛の厳しい理念に導かれつつ『明星』の歌は才に円熟味をもつてくる。

しかし、寛の「自我の詩」の理念のもとに道徳をおし破つて、今日の我々から見てもむしろ大胆な奔放と思われる恋を詠んだいわゆる「明星調」の恋歌が、その激しさにもかかわらず、当時、大旋風を巻き起したほど強烈なものを今日の我々に感じさせないのは何故であろうか。

この問を今さら発するまでもなく寛は「明星調」の恋歌に欠如しているものを見抜いていた。そこで彼は明星調の恋歌を思想ある歌へ移行させる事を三十六年以降の歌風円熟期において開始するのである。

「昨年の短歌壇」(下) (『明星』 卯歳才三号) において、寛は次のような事を語っている。

昨年の短歌を含むで居る思想の多種と多量なことは、万葉集以来未だ見ざる所である。宗教・哲学・恋愛、文学・歴史・風景、其他種々日常の感触、時事に對し現代の思潮に對する反抗等、あらゆるものを材料として種々として歌ひ得る事を示した。恋愛と稱するうちにも種々の方面での恋愛で、決して熱烈な一本調子のもの許りでは無い。

寛の右の言葉のままに『明星』の思潮をくみとる事には疑問がある。しかし、彼が『明星』において単なる恋愛歌ではなくそこに思想性をもたせる方向に歌風をむけていこうとしていることは十分くみとる事ができる。哲学的なものを「情」の世界に移行させる可能性を寛は「涼楊茶話」(『明星』卯歳才七号)で述べている。

近頃人生の意義とか死とかの問題が学界の上に行はれまするの結構な事と思ひます。(中略)『知』の方面から研究して証悟し得るならば何も云ふ事は無いが、今日の哲学で以て到底解し難いとすれば、何も失望するには当らぬ、更に他の方面から新しい解釈を試みるべきでせう。『情』に訴へる、即ち直覺の靈悟と云、^マ方面では宗教なり、文学美術なり、音楽なり、猶研究の余地が幾つも遺されてあります。

『明星』創草期の明治三十三年(四年)にかけて、一時「神」を詠むことが流行した時期があつた。

打沈みゆく子のすがた何やらの神とも見江て秋の日黄なり(通治)

わが見たる秋の御神は男神なり紅葉かざしてちさき太刀はく(鉄幹)

今は行かむさらばと云ひし夜の神の御裾さはりてわが髪ぬれぬ(晶子)

ちさき神もみちに泣きしたより冬のみくるま鞭加はりぬ

(碎雨)

ほそきくさは云へつよき御こゑなり重さく野にこたへ
ます神(蝶郎)

わかき子のとくも老いたる怨みにとゑにし神のみやし
ろこばたむ(通治)

世の常のそしりもつ子に今日なりぬゑにし神の袖のう
らみあり(鉄幹)

才十三号の「鉄幹歌話」(二)に取り挙げられている「神」を詠った歌の一部を取り挙げてみた。またまた神を詠った歌が、この時期には多く見うけられる。

しかし、これらの「神」の歌は多分に浪漫的であり、宗教的、または哲学的な「神」の概念にはほど遠いものであつた事はいうまでもない。

寛が浪漫的な歌からの脱皮を図ろうとした時、哲学的なものを目ざしたその発端はすでに『明星』三号に見い出すことが出来るのである。「国詩評釈」(三)の項で曙覧の歌を取りあげて次のように評している。

まのあたり今も神世ぞ神なくば草木も生ひじ人もうま
れじ

(前略) 僕はこの歌で臆気ながらも曙覧の人生観を窺ふことが出来た。世の俗詩人が開花の奇巧を銜う漫りに悟道家の口吻を学ぶものと同一視しては成らぬ。近世の軽薄才子である景樹や千蔭の歌には一首も斯様な哲学的な

ものはない。

と大いにその哲学的傾向を誉めている。

このような哲学的傾向の詩人に初期から好意を寄せながら、それらを単に浪漫的なものとしてしか表わすことができなかつたところに良くいえば「明星派」の長所があり、それがまた最大の短所でもあつたのである。

このような社風の中で、与謝野夫妻の共著になる『毒草』(明37・5)が刊行された。寛はその巻頭に、この頃から試みはじめた「絶句」三十首を記載している。

ゆきずりに、あくただひとめ、それもえにしや、あくただひとめ星のまなざし。

わが恋は火中の車、かた輪ぐるまよ、ただに怨をのせて燃えける。

これらの二首を見てもわかる如く、三十三文字になつている。この新形式短歌を紫紅は「その体まことに奇なりと雖も、これ鬼面人を嚇すの類、その実は同じく三十一字の歌のみ」「吾はむしろ大胆と謝野鉄幹君に相応せざる小細工なりと思惟す」「ただ片視観察者なれる我等には、六字を七字に述べたりとより思はれざる也」等と批難している。この『毒草』は両氏の必要以上の工夫のもとに出版された事が十分読者に伝わるにもかかわらず、恐らく寛が期待したと思われる『みだれ髪』的旋風を再現する事ができなかつた。その理由の才一にあげられるのは、新詩社をはじめ寛の歌論意識

が思想的、哲学的に傾いてきたと思われたにもかかわらず、その歌論の実践が功を奏していない事である。

よろこびは千載にいく夜、願ふはひと夜、あまき口づけあゝ君この夜。

山駕籠に牡丹そめたる緋遊禅京の講者も逢ふ高野道
臣捷たば長白の北五萬里を妻が呑る湯の料にと奏せ

右の三首は、『毒草』中の寛の歌の中で、紫紅が評の対象としてゐるものである。特に「山駕籠に牡丹そめたる」等は、紫紅が「絶唱」と評している歌である。

この代表的三首のいづれに我々は寛の思想を見いだす事ができるであろうか。むしろ、まだ初期に成立させた「明星調」が、その歌のなかに息づいているのを感じるのではないだろうか。

事実、この『明星』中期においては、『明星』歌壇は確かに一派の確立をなし得て円熟期に入るのであるが、寛自身には明らかに沈滞の色が見えはじめ、発表歌のない号も見受けられるようになる。

「自我の詩」というキャッチフレーズのもとに「個性」を重んじた歌を作る事を歌壇にもち込み、近代短歌の改革者の道を歩んだ彼は、「自我の詩」の理念のもとに開花した自由奔放な恋愛歌の円熟の次に、何を求めるべきであるかはその洞察力をもつて見ぬいていた事は事実であつた。彼が「思想」を歌の中に挿入する事の重要性、必要性を感じていた事

は、先に引用した「歌話」からみても明らかなるところである。しかし、『毒草』にあらわれた寛の歌には先にも述べた如く思想性を見い出すことは出来ないものである。寛はすでに先の「昨年の短歌壇」(下)における結びで「新詩社にも社外にも新進の才人が次才に頭角を露はさるゝ今日と成つては、生の如きは只管諸才人の驥に附して、新派和歌大成の盛観を望む事を榮譽とする者である」と述べている。この頃からすでに寛は、改革者としての道を後退しつゝあつたとみてさしつかえないであろう。

しかし、『明星』中期においては、寛はまだ「新詩社」の社友を率いていく力は十分に保持していた。そして彼の指導理念も、改革者の信条のもとに貫ぬかれた強靱なものであつた。それは「蒲鞭」(『明星』午歳才八、九、十号連載)サブタイトル「恰人」を笑う(中)の中に記載されている次の八箇条をみても明白なところである。

才一として、謙遜になる事を挙げている。

詩人は一生真面目で居り、謙遜で居らねばならぬ。詩人の理想は無量無辺際だ、然るに少しでも滿意放恣の心が萌しては、進歩することが出来ぬ。他人の忠言も耳に入らぬ。古今の詩人の長所美所も目に附かぬ。

才二は、抱負を大にする事としてゐる。

詩を作るからには、よし出来ないまでも、努力して才一流の詩人に成らう、千古の絶唱を遺さうと心掛やうでは

無いか。

才三として、日本語を研究する事を挙げている。この才三の中では特に技巧について述べている箇所のみを次に抜粋してみる。

世には技巧と云ふ事を、唯だ優しい、美しい、華やかな、又は流暢な詞を並べた、云はゞ造り花の如き物を云ふと心得て居る人のあるのは迷惑だ。何も優麗な詞ばかりとは限らぬ、平明な詞、粗撲な詞、雄健な詞にせよ、俚語、方言、俗語にせよ、其の一一の詞の特色や価値を飲込んで無学な為めで無く、間に合わせて無く物数奇で無く、必ず用ゐねばならぬ場合に適当に用ゐて、一篇の文として、一首の詩として、最も面白く、最も有効完全に、詩人の思想感情を發表するのが、夫れが技巧と云ふものである。

才四には、常識を養う事を挙げている。

才五には、古今の文学を読み味う事を挙げて

古今の文学書を一通り涉猟して、思想、感情、趣味、技巧等の面白きなり、沿革なりを心得よと勧告する。

と述べている。寛は特にこの方面には、年少の頃より力を入れていたようである。

才六には、他の学問、技芸、社会状態等に通じることとしている。それは『明星』才一号の巻頭の言の主旨と何ら變化するところがない事は注目に値する。

才七は、神経を鋭敏にする事を記している。

才八は、観察を微細にする事として、次の様に記している。

旅行をしても、読書にしても、何事に触れても、観察が微細で無くては、何事も判断を誤る。又こまやかな感情や思想や趣味が解らなくなる。神経が鋭敏で、空想が豊かでも、物事の観察が粗雑では、その空想は独よがりになる。

以上の八箇条は、サブタイトルの「『伶人』を笑ふ」ですでに明らかなる如く、薰園の歌集に対する嘲笑文の中に出て来るものであり、薰園に対する忠告の如き形式をとつてはいるが、これら八項目は、一般作歌者への忠告でもあつたわけであり、また寛の常に変らぬ作歌の根本精神であつたのである。

『明星』も明治四十年に入つた頃には、すでに展開され始めていた自然主義文学運動が非常な勢いで文学の世界に押し寄せていた。この文学運動に対して、沈滞していた寛の意識は再び燃えあがつた。彼は明治四十年十二月号で「『明星』を刷新するに就て」という大宣言を行つたのである。

文壇、何なれば爾かく閑人の多きぞ、又何なれば爾かく情氣瀾漫する。見よ、無益なる自然主義の論議に日を消する諸君、そこにも、彼処にも。又見よ、性欲の挑発と、安価なる涙とを以て流俗に媚ぶる、謂ゆる自然派の

悪文小説は市に満つ。想ふに、彼等、人として統一の自覚なく、文人として天成之しく、甚だ空想と情熱と詞藻とを欠き、古代文芸の修養浅く、はた、社会競争の苦闘より未だ心上の鍛錬を嘗めざる平凡の徒が、偶ま慈に平凡なる安堵の地を見出でて、姑しく落居せむとするものか。詩歌の淨域も亦漸く彼等が跳舞の場たらんとす。あゝ我等、不敏と雖、此際に努力せざるべしむや。『明星』は来る新年号以下、社外先覚の熱烈なる助成と、社中人一層の刻苦精励とを以て、一大刷新を加へ、文芸の大道に一個の標石を建てむことを期す。

寛は右の如き反自然主義宣言を行い、真向からこの新主義に対抗して行こうとする態度をとつたのである。『明星』草創期における改革者の姿が再現されたかに見えたこの大宣言は、しかし意外な結果をもたらしたのであつた。

この宣言を契機として、今や『明星』にとつてかけがえない吉井勇、北原白秋、太田正雄、深井六川、長田秀雄、長田幹彦、秋庭俊彦等が脱退したのである。明治四十一年二月号の「社告」にその脱退がつけられている。

寛が時代の主義、思想に順応せず、彼自身の意見を通したにもかかわらず、寛の歌論はもはや彼等をひきとめておくだけの魂力を持つてはいなかつた。

その事は『明星』を刷新しようとした当時彼が持つていた歌論がどのようなものであつたかを見れば明白なところであ

る。

明治四十一年四月号から九月号にかけて、寛は「歌話」を連載するが、その序文の一部を次に抜萃してみる。

万葉集、古今集、新古今集は余の最も感化を受けた古歌集であるが、中にも万葉集は今日と雖も之を披く毎に新しい刺激を受けることが尠くない。世には万葉集にある詞づかひを模擬して早くも歌の真髄を得たりとする人々を見受けるが、何ぞ知らむ、其れは万葉集の形骸を抱いて喜ぶ人々である。又万葉集の撲実簡古なる一部のみを伝へて、その複雑多様な他の大部分を閑却して居る人々もある。余は最初から万葉集の形骸を措いて、其の自由に如何なる自然をも歌はうとする豊富なる同情と、我国固有の感情の上、外来の印度思想支那思想を喜んで吸収消化したる積極的態度とを学ぼうと心掛けた。新詩社の歌の發展し行く有様を見れば言う迄もなく万葉集の真精神が土台を成して居ることが明らかである。万葉集の代表的作者は皆当時の革新派である、善き意味のハイカラ詩人である。今日の歌壇の保守派諸氏が考へるやうな隠居じみたものには無い。余は此意味に於て特に万葉集を尊重するのである。

この序文を読む時、まず我々の念頭に浮んでくるのは『明星』才三号（明33・6）の「歌壇小観」における寛の次の言葉である。

今は歌人と新体詩人とを区別する要を認めぬ。我々は清新なる長歌即ち新体詩を作ると共に、又一方には短形なる新体詩即ち短歌を作るのである。万葉集を祖述するでもない。真淵や景樹の継承者と云ふでもない。

そしてまた、『明星』才六号（明33・9）の「新詩社清規」十四条中の次の一項である。

一、われらの詩は国詩と称すれども、新しき国詩なり。明治の国詩なり。万葉集古今集の系統を脱したる国詩なり。

この八年の歲月の間の寛の『万葉集』に対する変遷は一体何を意味するのであろうか。彼の関心は明らかに、かかる伝統的な面へ移行を始めているのである。彼はその移行を「今日の歌壇の保守派諸氏が考へるやうな隠居じみたものではない」と弁明する。

しかし、「新詩社清規」によるその新鮮味において、常に『明星』を率いてきた寛の歌論のこのような変遷は、すでに『明星』の運命を決定的なものとしていた。

『明星』は明治四十一年十一月、百号記念特集号と銘うって、二百四十九頁にわたる大冊を刊行し、八年八カ月にわたるそのフィナーレを飾りつつ終刊となり、寛は彼独自の意による発表の場を失つたのである。

寛の歌業は、この『明星』終刊と共に終りをつけるわけではないが、常に『明星』と共にあつた彼の歌論は、『明星』

終刊と同時に一応幕をとじたとみるのが妥当ではないかと思う。

注、「明星」六号、七号（明33・9、10）には「鉄幹歌話」（十月一日出版・定価金廿五銭・新詩社）という書の刊行広告が記載されているが、実際には刊行のはこびにならなかつた模様である。従つて鉄幹の歌論書は一冊も刊行されていない。

執筆者紹介

原田芳起	本学教授
西畑実	本学講師
安田章生	本学教授
岩鼻絹子	本学図書館司書補 <small>（本学国文学科） 昭和四十一年三月卒業</small>
嶽恭子	本学国文学科学生